

京都大学	博士（文学）	氏名	山形 美有紀
論文題目	初期ネーデルラント絵画におけるドイツ由来の図像体系の受容と展開—ハンス・メムリンク作品研究—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>ドイツ出身の画家ハンス・メムリンクは、ケルンでの遍歴修業を経て、1465年に南ネーデルラントの国際商業都市ブルッヘで工房を開設した。彼はドイツ絵画の古式な造形語彙と初期ネーデルラント絵画の最新鋭の写実様式を巧みに折衷し、独自の画境を切り開いたのである。そのような異色の画歴にもかかわらず、彼は移住先の芸術環境に完全に同化した「初期ネーデルラント絵画の代表的画家」として認知されてきた。それゆえ従来のメムリンク研究では、ブルッヘに居住した地元の上流市民やイタリア商人のパトロネージに重点を置く傾向があり、画家の故国であるドイツとの関係性は相対的に注目度が低い。メムリンクの視覚源泉の一部がケルン派絵画に求められることは、すでに先行研究でも指摘されてはいるが、主としてキリストの受難を異時同図法的に描写した物語画が議論の的となり、考察対象とする作品選定に偏りがある。ところが筆者は、メムリンクの視覚源泉を紐解く過程で、ドイツ起源の図像や物語表現が、他の重要な作品においても効果的に組み合わせたり、鑑賞者の信仰心を喚起する作用を担っていることに気付いた。したがって、従来ドイツとの関係では論及されなかったメムリンク作品についても再検討を加え、彼の「知られざるドイツ性」を浮き彫りにする必要があるだろう。</p> <p>さて、初期ネーデルラント絵画全般の受容史研究においては、イタリア・ルネサンス美術に及ぼしたインパクトが古典的な研究テーマとされてきた。隣国ドイツとの関係性についても、ドイツ人画家が南ネーデルラントを遍歴して最先端の写実様式を故国に持ち帰ったとする見方が、すでに定説として確立しており、2010年にはそれを作品展示で実証する壮大な展覧会までもが開催されたのである（<i>Van Eyck to Dürer: The Influence of Early Netherlandish Painting on European Art, 1430-1530</i>）。しかしながら、南ネーデルラントの画家たちがドイツの古式な図像を学習し、それらを精緻な新様式に変換したプロセスは、個別的な事例研究に留まり、包括的には論じられていない。本稿の目的は、両地域間の美術交流を敢えて逆方向から捉えること、その立役者としてのメムリンク像を再構築することにある。</p> <p>本稿はそうした趣旨に鑑み、ドイツ的な造形要素を包含するメムリンクの4作品を、ケース・スタディの対象に選定した。前半部では旧約聖書『雅歌』の世界を体現した《ジャン・ド・セリエの二連板》《薔薇園の聖母子の二連板》を考察し、後半部では聖ヨハネ施療院の注文作である《聖ヨハネ祭壇画》《聖ウルスラの聖遺物箱》を考察する。各章の概要は、以下の通りである。</p>			

序章では、上記4作品の個別研究に着手する準備段階として、メムリンクの全作品の中からドイツ的な図像や造形を抽出し、「ドイツ人画家」メムリンクの全体像を的確に把握することを目指す。

第1章では、甘美で典雅な情趣を湛えた小型絵画の優品、《ジャン・ド・セリエの二連板》（1487—1492年、パリ、ルーヴル美術館）を考察する。左パネルの「聖女に囲まれた聖母子（Virgo inter Virgines）」は元来、女性に貞節の規範を示すために利用された図像であるが、それが世俗男性の注文作に適用された経緯は判然とせず、右パネルに「聖ゲオルギウスの竜退治」「パトモス島の福音書記者聖ヨハネ」の物語場面が描き込まれた理由も解明されていない。しかしヤンセンスは近年、本二連板を依頼した香辛料商人ジャン・ド・セリエが、ブルッヘの聖ゲオルギウス弩手組合に所属した記録を発見した。そこで本稿はこの新たな知見を図像解釈に応用し、注文主の宗教的救済と社会的地位の顕示を両立させるために、画家がいかなるイメージ戦略を打ち出したのかを詳らかにする。

まず「聖女に囲まれた聖母子」の図像系譜を辿り、従来のネーデルラント起源説を反証し、新たなドイツ起源説の妥当性を示す。そして画中に克明に描写された植物を同定し、ジャンの職業に関連付けた解釈を試みる。本二連板の場合、聖母子と女性聖人の集う「閉ざされた園」は、ジャンが取引した香草や薬草を付随的に描き込む口実になりえたのである。

次に、聖カタリナだけでなく聖アグネスや福音書記者聖ヨハネまでもが「キリストの花嫁」であることに着眼し、本二連板全体の図像プログラムを仔細に検討する。そして「神秘の結婚」や「無原罪のお宿り」の思想を体現した左パネルと、3人の男性聖人や「黙示録の女」が登場する右パネルとの間に、図像学的な親和性が認められることを論証する。

最後に、当時の騎士道文化の歴史の実態に鑑み、画中の「聖ゲオルギウスの竜退治」は弩手組合でのジャン自身の武勲を顕彰するために描き加えられた、という独自の見解を提起する。ネーデルラント各都市の射手組合・弩手組合・修辞家組合に属する市民は、貴族趣味の模倣を通じて社会的地位の上昇を図り、共同体帰属意識を表す絵画を注文した。《ジャン・ド・セリエの二連板》はその早期の作例であり、時に結婚式にも擬えられた弩手組合や宮廷の祝祭を追憶させたと考えられる。以上の考察からメムリンクは、注文主ジャン・ド・セリエが理想に掲げた、高貴なる騎士道の実践者としての自己表象を、絵筆で巧みに実現したと結論する。

第2章では、第1章の研究成果の発展形として《薔薇園の聖母子の二連板》（1490年以降、ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク）を考察する。左パネルはシュテファン・ロホナー作品に基づく薔薇園の聖母子と奏楽天使を、右パネルは聖ゲオルギウスに執り成された世俗男性の祈禱者を表す。右パネル裏面は、ケルンまたはヴェスト

ファーレン地方で発祥した図像「聖アンナ三体像 (Anna Selbdritt)」を表す。本二連板において筆者が改めて着目したいモチーフは、右パネルの祈禱者が手に持つ、ポマンダー付きロザリオである。ポマンダーとは、各種の香草や薬草を調合して詰め込んだ香り玉の総称であり、ペスト予防を目的に携帯された。15・16世紀のドイツには、ペストの予防法と治療法に関する書物が数多く流通したが、そのなかではポマンダーを身に付けることが推奨され、薫香料のレシピまでもが解説されたのである。この種のレシピを解読してみると、薔薇・乳香・アロエ・シナモンなど、『雅歌』に出てくる植物の名称が散見される。したがって本二連板は、『雅歌』を典拠とする「閉ざされた園」を描き出すことにより、ポマンダーに詰め込まれた薫香料の芳香を想起させたと考えられる。管見の限りにおいて、ポマンダー付きロザリオの描写が最初に流行の兆しを見せたのは、15世紀末から16世紀初頭にかけてのドイツ絵画においてである。ドイツの諸作例と比較してみると、メムリンク《薔薇園の聖母子の二連板》は、南ネーデルラントにおいてポマンダー付きロザリオの描写が受容された早期の作例に位置付けることができる。

本稿の後半部は、メムリンクがブルッヘの聖ヨハネ施療院のために手掛けた作品群を考察対象とする。その導入部となる第3章では、施療院の沿革を辿り、各作品の概要を確認する。聖ヨハネ施療院は設立当初より半聖半俗を貫いてきたが、共同体の維持存続をかけて1459年にトゥルネー司教の保護下に入り、アウグスティノ会修道院として承認を受けた。1474年頃、施療院の一角をなす聖コルネリウス礼拝堂に、新たな聖歌隊席が増築された。これを機にメムリンクに依頼され、1479年に礼拝堂の主祭壇に設置されたのが、《聖ヨハネ祭壇画》である。それから約10年後の1489年、同じ礼拝堂に《聖ウルスラの聖遺物箱》が奉納され、聖遺物奉遷の儀式が厳粛に執り行われた。そこで、儀式の公式記録としてラテン語で書かれた「聖遺物奉遷記」を解読し、納入物の内訳を把握しておく。

ところで近年、聖ヨハネ施療院の遺構から、中世後期の修道士・修道女・入院患者・地元市民の墓石や石棺が多量に出土した。そのなかには、《聖ウルスラの聖遺物箱》の四人目の寄進者とみられる助修道女、リスベット・カセムブロートの墓石も含まれていた。一連の発掘調査の成果は、《聖ヨハネ祭壇画》《聖ウルスラの聖遺物箱》を死者追悼のコンテクストに位置付け直すことを要請する。

このような問題意識に立脚しながら、第4章では《聖ヨハネ祭壇画》(1474—1479年、ブルッヘ、メムリンク美術館)を再考する。本祭壇画は、「玉座の聖母子と諸聖人」を表した中央パネル、「洗礼者聖ヨハネの斬首」を表した左パネル、および「パトモス島の福音書記者聖ヨハネ」を表した右パネルから構成される。一般に中世の施療院に飾られた絵画は、「磔刑」「最後の審判」等の主題、ペストや麦角病に関係する特定の聖人を表すことが多い。これに対して《聖ヨハネ祭壇画》は、一瞥

したところ死や病との直接的連関を見出し難いが、その主題選択の意図は先行研究で十全に解明されていない。だが筆者は、本祭壇画の中央パネルの着想源のひとつが、ヤン・ファン・エイクが典型的な墓碑画の形式で描いた《ファン・デル・パーレの聖母子》（1434—1436年、ブルッヘ、フルーニンヘ美術館）であることに再注目した。そこでまず、同時代に流行した墓碑画・墓碑彫刻の諸作例—玉座の聖母子、その前に跪く故人、執り成しの聖人を表した諸作例—を網羅的に分析する。そのうえで、メムリンクが《聖ヨハネ祭壇画》中央パネルを構想する際、「聖女に囲まれた聖母子」の図像伝統と、墓碑画・墓碑彫刻の最新形式とを折衷的に組み合わせる可能性について検証する。

周知のとおりメムリンク《聖ヨハネ祭壇画》の左パネルは、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《聖ヨハネ祭壇画》（1454年頃、ベルリン国立絵画館）等に基づいて構想された。とりわけ、メムリンクが強調して描いたヨハネの首は、聖餐式で供される聖体を連想させたばかりか、聖ヨハネ施療院が所有する洗礼者の聖遺物の存在を喧伝したのである。

右パネルの「パトモス島の福音書記者聖ヨハネ」は、『ヨハネ黙示録』5章から13章までの場面を異時同図法的に描き出す。そのなかでも、神の玉座を取り囲む長老たちの描写は、当時のドイツで24人の長老たちへの崇敬が高揚し、オットー・フォン・パッサウ著『24人の長老』、ヨハン・ニーダー著『24の黄金の豎琴』等の書物が流通した現象に関連付けて解釈される。そこで本稿においては、両著作の彩飾写本やインキュナビュラに掲載された挿絵、および24人の長老たちを描いたケルン派の墓碑画（1460年頃、ケルン、ヴァルラフ＝リヒャルツ美術館）が、メムリンクに着想を与えた可能性について論証する。

先行研究で議論されてきたとおりメムリンク《聖ヨハネ祭壇画》は、聖餐式に係る多様なモチーフを内包する。殊の外、聖バルバラの塔の中に描き込まれた聖餅は、ドイツの図像系譜に連なるモチーフであり、本祭壇画全体に通底する聖餐式の主題を補強したと考えられる。その一方、前述のとおり本祭壇画が複数の墓碑画から着想されたという経緯や、施療院内に大勢の死者が埋葬されたという考古学的知見は、本祭壇画を死者追悼の観点から再考することを促す。したがって本祭壇画は、厳密には聖餐式の主題を体現する「祭壇画」でありながらも、「墓碑画」に類する機能を兼ね備えていた、との知見が導かれる。

第5章は、《聖ウルスラの聖遺物箱》（1489年以前、ブルッヘ、メムリンク美術館）を論題に据える。本聖遺物箱は、平側の各面に聖ウルスラ伝の物語画、妻側の各面に「聖母子と修道女」「庇護マントの聖ウルスラ」を描いたものである。まず、第3章で提示した「聖遺物奉遷記」に基づいて納入物の内訳を精査し、その約半数がエルサレムから持ち帰られた土の聖遺物であることを指摘する。

続いて、本聖遺物箱上に6場面に分かれて展開する、聖ウルスラの巡礼と殉教の物語画を分析する。本稿では、ケルンの教会施設等に来歴がある3組の物語画連作との比較検討を試み、共通の構図やモチーフを洗い出すとともに、巡礼の物語場面にフォーカスした本聖遺物箱の特異性を明らかにする。本聖遺物箱は厳密なところ霊的巡礼の補助装置とは異なるが、それに類する機能を果たしたと考えられる。聖ヨハネ施療院の修道士・修道女・入院患者・来訪者は、箱の周囲を歩き回る身体運動を伴い、聖ウルスラと一緒にケルン・バーゼル・ローマという宗教都市をめぐる擬似体験を通じて、まるで贖宥を集めるかのような感覚を抱いたことだろう。メムリンクは、一貫した旅のテーマを顕現させる、巡礼への憧憬に訴えかける、といった新機軸を駆使して信徒の宗教心を喚起したのである。

ところで本聖遺物箱の物語表現は、船のモチーフを殊更に強調する点でも、従来の聖ウルスラ伝の描き方とは一線を画する。そこで本稿独自の試みに、改めて船の図像系譜を通時的に辿り、メムリンクがこのモチーフに込めた象徴的意味を紐解いてゆく。そもそも船は初期キリスト教時代より教会の象徴とされてきたが、15世紀後半から16世紀前半にかけて欧州各地で隆盛した聖ウルスラ同信会は、船による救済のイメージを積極的に版画化し、会員募集のプロパガンダとして利用した。本稿はその最初期の例である1470年代ドイツの木版画が、メムリンクの直接的な参照源となった可能性を新たに指摘する。さらには、欧州各地の聖ウルスラ同信会が発行した木版画との比較検討を通じて、メムリンクが物語画中に拡大して描いた船は、死者を救済に導く教会の象徴であり、終末論的なコノテーションを帯びていることを明らかにする。

そこで再考を要するのは、本聖遺物箱の全体形状が、ブルッへの聖母教会に付設された「天国の門」をモデルとすることである。他方でヤン・ファン・エイク《教会の聖母子》（1440年頃、ベルリン国立絵画館）等に基づく妻側の聖母子像もまた、聖母マリアとエクレスシアを同一視する思想を直裁的に表す。したがって《聖ウルスラの聖遺物箱》は、物語画中で際立つ船舶モチーフ、教会を模した全体形状、礼拝堂を背景とする妻側の聖母子像を通じて、エクレスシアという概念を具現化し、1459年の聖ヨハネ施療院の宗教組織化を表明することを企図したものである。

本稿では以上4作品のケース・スタディを通じて、メムリンクの芸術にはドイツから伝来した多様な図像体系・宗教実践・思想潮流が交錯し、各作品の機能や意味内容を読み解く伴になっていることを明らかにした。今後は、本稿で十分に論究しきれなかった作品や、メムリンク以外の画家の作品も射程に入れながら、国境を超えたイメージの伝播について研究を継続する所存である。

(論文審査の結果の要旨)

周知の通り、西洋美術史における15世紀は、まさに革新の時代であった。イタリアでは古典古代の美の復興を謳う「ルネサンス美術」が開く一方、現在のオランダ、ベルギー、ルクセンブルク、フランス北部に該当するネーデルラント（低地地方）では、油彩技法という技術革新に支えられて、現実世界での視覚体験を精緻に再現した写実性の高い「初期ネーデルラント絵画」が隆盛した。こうした状況下、イタリアとネーデルラントという美術の二大中心地に挟まれたドイツは、地理的に近接するネーデルラント美術の強い影響下にあった。当時のドイツ人画家たちは、生地で徒弟修業を終えたのち、遍歴修業の過程でネーデルラントに赴き、画家工房で助手として働きながらネーデルラントの最新の絵画様式を学習し、故郷に戻ったのである。

本論文が考察するハンス・メムリンク（1440年頃生まれ—1494年没）は、15世紀後半のネーデルラント絵画を代表する画家である。初期ネーデルラント絵画の礎を築いたヤン・ファン・エイクとロヒール・ファン・デル・ウェイデンの成果を速やかに吸収したメムリンクは、南ネーデルラントの中心都市ブルッヘで工房を構え、祭壇画や私的祈祷のための祈念画などのキリスト教絵画や肖像画を数多く手がけた。その顧客には、ネーデルラントの富裕層のみならず、ネーデルラント在住のイタリア人やハンザ同盟都市の商人などが名を連ねていたのである。このように、15世紀後半のネーデルラントにおいて画家として最も成功を収めたメムリンクは、実は、ドイツのゼーリゲンシュタット出身のドイツ人であった。彼は、同時代の他のドイツ人画家の例にもれず、遍歴修業でネーデルラントに赴き、当地に留まって自身の工房を開設し、成功を収めた画家だったのである。メムリンクの描く絵画は形態の点では完全にネーデルラントの絵画様式に同化していることから、従来の研究においては、初期ネーデルラント絵画の正統にメムリンク作品を位置付けることが前提となっていた。しかし、近年、他のネーデルラント絵画には見られないメムリンクの独特の物語叙述法の源泉を、彼が生まれ育ったドイツ語圏に求める研究がなされるなど、メムリンク芸術におけるドイツ的な要素が徐々に注目されつつある。本論文はこうした研究動向を受けて、メムリンクの諸作品におけるドイツ語文化圏に由来する特性を丹念に抽出する調査研究を行った。その調査結果に基づき、15世紀後半の人々の多様化する信仰実践と自己顕示欲に対応すべく、多様性に富んだドイツの宗教図像や物語叙述法をネーデルラントの洗練された絵画様式に融合させるメムリンク芸術の特性を、実証的かつ説得力をもって明らかにしている。

本論文の具体的な成果としては、主に次の二点が挙げられる。第一の成果は、ドイツおよびネーデルラントに流布していた絵画群や民衆向けの本版画群、宗教パンフレットなどを精査することで、メムリンクの宗教画諸作におけるドイツ語圏由来の複数の図像を具体的に特定したことである。加えて、洗練された趣味をもつ顧客の要望にドイツ語圏由来の図像を合致させるべくなされた数々の創意工夫についても、都市の富裕層の社交実態や宗教施設の性質などに着目することで、解き明かした。例えば、

《ジャン・ド・セリエの二連板》（1487—1492年、パリ、ルーヴル美術館）では、左翼画面に、ドイツ語圏では流布していたもののネーデルラントではあまり知られていなかった「聖女に囲まれた聖母子」の図像が採用され、右翼画面に跪いて祈りをささげる注文主の姿が守護聖人とともに描かれている。こうした構成により、本作品は、私的祈祷の装置という本来の機能に加えて、都市の富裕層があこがれる騎士道的愛をも表象することに成功している、という。加えて、聖女たちと聖母子を囲む緑あふれる園は、『旧約聖書』「雅歌」に登場する香しい花々を連想させる一方、注文主の足元には、様々な薬草が写実的に描きこまれている。これにより、香草や薬草を商う香辛料商人ジャン・ド・セリエの職業をも示唆されているのである。

本論文の第二の成果は、美術史に加え、キリスト教史や音楽史、考古学、社会史、医療史といった隣接領域の成果を積極的に援用することで、ムムリンクの宗教画が有する重層的イメージの喚起力を詳らかにした点である。聖ヨハネ施療院付属礼拝堂の主祭壇画として制作された《聖ヨハネ祭壇画》（1474—1479年、ブルッヘ、ムムリンク美術館）に関して、本論文は、まず、ドイツ語圏由来の図像を特定し、祭壇画全体の図像プログラムを効果的に組み立てることに大きく寄与していることを明らかにする。加えて、施療院の敷地内に多数の遺体が埋葬されていたことを確認した近年の考古学成果を受けて、付属礼拝堂の主祭壇画である《聖ヨハネ祭壇画》は、施療院に関わった者たちの墓碑画としての役割をも期待されていたとの結論を得て、これまで紛糾していた本作品の図像解釈に説得力ある新説を提示した。そのほかにも、本論文は、ムムリンクが、ブルゴーニュ宮廷で発達した様々な楽器を絵画に描きこむことで祝祭的雰囲気演出したり、ドイツで流行していたペスト予防のための「ポマnder」と呼ばれる薬草入れを注文主の跪拝像に持たせることで、病からの庇護という当時の人々の切実な願いに適ったイメージを提示したりしたことを読み解いている。

もちろん、本論文に欠点が全くないわけではない。例えばムムリンク絵画における「ドイツ性」が論じられるが、そもそも、当時のドイツは領邦国家の集合体として存在しており、近代的な意味合いでの「ドイツ」という意識は希薄であった。とはいうものの、本論文はこれまで一方通行的に語られることの多かったネーデルラントとドイツの文化交流を双方向的に捉えなおすことにより、美術史の通説に一石を投じるなど、15世紀の西洋美術史全体をより豊かに理解することに大いに貢献している。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年12月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。